

反＝創造の形而上学批判（III）

——プロティノスからハイデガーまで——

道 躰 章 弘

IV. アルトゥル・ショーペンハウアー（承前）

ショーペンハウアーは註の中でこう付言する。

《本来のユダヤ宗教（Yudenreligion），すなわち『創世記』ならびに『歴代史』全篇を含む全史書で説かれているそれは，不死性の教義の痕跡をも止めぬ宗教であり，ために全宗教中最も粗野なものになっている（……）。死後の実在について考えた様子はどこにもない（……）。故に，この宗教は全宗教中最も粗野かつ粗悪な宗教である（Darum ist sie die roheste und schlechteste unter allen Religionen）。それは飽くまでも不条理かつ不愉快千万な有神論に固執する（besteht bloß in einem absurden und empörenden Theismus……）。ユダヤ教がヨーロッパを支配する宗教の基盤となったことは痛恨の極みである。何故なら，そこには形而上学的傾向が毛筋ほどもない（ohne alle metaphysische Tendenz）のだからである》。

不死性の問題に関するショーペンハウアーの論理的分析は明らかに間違っている。

人間の魂が非被造で，実際に（その意識の有無に拘わらず）絶対「存在」と同一であれば，それは永遠の過去から恒常的に実在し，永久に実在しよう。そうショーペンハウアーは考える。ならば，何故に人間の魂は，一般に，絶対「存在」との，「ブラフマン」との，「実体」との事実上の同一性を知らないのか。何故に，波羅門が，^{ブラフマン}プロティノスが，スピノザが，フィヒテが，ショーペンハウアーが，つまり秘儀を伝授された者が，人間の魂にこの同一性を敢えて教授する必要があるのか。何故に「絶対」が，錯覚，仮象，苦悩，無知などの循環に己れを委ねるのか。先の仮説に固執する者は以上の問いに答えねばなるまい。

非被造ならぬ魂，他者に創造された人間の魂の実在（反ショーペンハウアー説）には「始まり」がある。被造物はすべて〔或る瞬間に〕実在し始めるのだから。しかし〔魂の〕「贈与者」が，創造主が，人間の魂に，未来における存在を付与すれば，その未来における存続の可能性は大である。

ヘブライの一神論者はこの見地に立つ。そこにはいかなる矛盾もいかなる論理的破綻もない。

創造されぬ魂が独力で実在し始めるという主張は不条理であろう。己れの所有しない存在を己

れに付与し得る存在があり得ようはずはないからである。

永遠の過去からの持続的実在なるものとは無縁の人間の魂が、未来永却、独力で実在し続けると思うのは幻想である。

しかし人間の魂は実在する。しかも魂自体が己れに存在を付与したわけではないとすれば、魂は存在を受け取ったのである。ならば、人間の魂は、存在もしくは実在を受け取り続ける限り、未来においても依然として実在し得るはずである。

しかし、人間が創造を通して存在を贈与されるという考えを認めたがらぬショーペンハウアーは、一神論的仮説から自説へと密かに飛び移る。すなわち、被造の存在は、仮に、飽くまでも仮に、存在もしくは実在を受容し続けるならば存続するという考えから、存在者はすべて非被造であるという説へと移行する。ショーペンハウアーによれば、過去において実在しなかった人間が（これは馬鹿げた一神論的仮説ということになる）未来において実在するはずはないのである。

V. フリードリヒ・ニーチェ (1844-1900)

宇宙すなわち「被造物」の究極の目的とは何か。それは「希望」である。宇宙の合目的性を否定する言辞を弄する者は希望を打ち砕いたも同然である。

宇宙の合目的性がどうして人間に判るのか。宇宙の歴史と自然史の研究によってそれが判るのである。19世紀に自然の歴史を垣間見た人類は20世紀になって漸く宇宙のそれを発見する。人類は発見する、宇宙ならびに自然の歴史の各段階が将来の諸段階（物理学的・化学的・生化学的なそれ）に予め適応しているのを。そこでは、未来は過去よりも常に「大（多）」であり、前者が後者を準備するのである。

宇宙の合目的性を峻拒したのは、スピノザ、フィヒテ、マルクス、ニーチェ、ハイデガー等、「創造」を否定した哲学者である。

「創造」が知的なものでなければ、そこに方向性がなければ、推進すべき知的計画がなければ、「創造」の合目的性なる言葉は無意味である。スピノザが否定しなければならぬと考えたのはまさにこのことである。

宇宙の起源（すなわち「創造」）とその合目的性を発見する知性の持ち主はヘブライの民の中から現われた。終末に向けて段階的に実践もしくは推進される「創造」の歴史、それがそのまま宇宙の歴史であるが故に、それは知解性の対象たり得るのである。

ニーチェのような哲学者は納屋の中から永遠帰郷という最古の神話を探し出し、それで「創造」の合目的性を隠蔽しようとした。その結果、ニーチェの愛読者は結構な偽推理を宛てがわれるはめになったのである。

《宇宙に目的なるものがあれば、それは達成されねばなるまい。宇宙に意外な終末なるもの

があれば、それもまた現実化されねばなるまい (Hätte die Welt ein Ziel, so müßte es erreicht sein. Gäbe es für sie einen unbeabsichtigten Endzustand, so müßte er ebenfalls erreicht sein)》(フリードリヒ・ニーチェ『1880年代の遺稿』, éd. Karl Schlechta, III, p. 485)。

過度の苦痛を覚えずにこの重大な偽推理を味読するために、ライプニッツの忠告に従って、ニーチェの論点を整理してみよう。

1. 宇宙は非被造なるが故に永遠であり(アリストテレス説), しかも損耗と老化を免れない, 或いは宇宙には何らかの目的がある, そう仮定すれば, 宇宙は永遠の昔に損耗していなければなるまい。何らかの目的があれば, それは永遠の昔に達成されていなければなるまい。

一例を挙げよう。太陽はおよそ 50 億年前から不可逆的に水素をヘリウムに変換し続けている。太陽が過去において永遠であれば(アリストテレス説。当人は太陽の内部で生じる変化を知らなかった), 太陽は永遠の昔に燃え尽きていなければなるまい。これは事実と反する。

2. ところでニーチェが立てた仮説「宇宙は非被造なるが故に過去において永遠である」は所謂論点先取の虚偽である。

3. 故に宇宙は目的を有せず, 不可逆的に損耗することはない。これは, (ニーチェの耳にも届いていた)「カルノー＝クラウジウスの原理」すなわち熱力学の第二原理に対する反論の意味を持つ。

こういう論理(と敢えて言うておくが)の運びを読者の前で嘲弄しても始まらない。ニーチェは論証すべき命題を既定の事実として振り翳す。曰く, 宇宙は非被造なるが故に過去において永遠である, と。

宇宙は非被造なるが故に過去において永遠であったと仮定すれば, 宇宙史ならびに自然史における不可逆のプロセスは, [熱力学の] 第二原理に従うプロセス(エントロピーの増大)にせよ, 情報[形相]化の進転に伴うプロセスにせよ, いずれも疾うの昔に, 遙かな過去に, 永遠の過去に完了していなければなるまい。

これは事実と反する。植物が芽生える, 猫の仔が生まれ, そして死ぬ。太陽が水素をヘリウムに変え, 不可逆的に消耗する。地球を含む銀河系の星々も消耗する。宇宙の全銀河系の星々もすべて消耗する。いずれも歴然たる事実である。

従って, 宇宙と自然とに生成なるものが実在すれば, つまり発生もしくは創造による生成があれば, 損耗もしくは腐敗もしくは老化によるそれがあれば, 宇宙は過去において永遠ではあり得ない。

宇宙が過去において永遠であるためには, 未来においても永遠でなければならない。不可逆的に損耗する宇宙は「始まり」のある宇宙である。

従って, 宇宙は過去ならびに未来において永遠であると主張するためにはこう断定する他はない, 生成, 発生, 腐敗等を免れぬ諸々のプロセスは錯覚もしくは仮象である, と。

これは紀元前 500 年頃のパルメニデス説に他ならない。

同説に反対する者は、やはり紀元前500年頃の偉才エフェソスのヘラクレイトス説を持ち出す他はない。宇宙のシステムは循環的なものである、と。不可逆的消耗は単なる外観であって、その実、旧に復するのだが、委細は人知の及ぶところではない、と。

宇宙は非被造なるが故に過去において永遠もしくは未来において永遠であると主張するために、生成仮象説（パルメニデス説）を唱えるか、生成循環説（ニーチェ説だが、マルクスの盟友エンゲルスの説でもある）を持ち出して、是非とも生成を否定しなければならない。

だが、ニーチェの偏愛する偽推理に戻ろう。

《宇宙の運動に終末＝目的なるものがあれば、それは達成されていなければなるまい (Wenn die Weltbewegung einen Ziel-zustand hätte, so müßte er erreicht sein)。しかし基本的な事実はただ一つしかない (das einzige Grundfaktum)。終末＝目的などはどこにもないのである》(『遺稿』, éd. cit., p. 684)。

論点を整理しよう。

1. 無神論が真理であれば、宇宙は非被造である。
2. 宇宙が非被造であれば、それは過去ならびに未来において永遠である。
3. 宇宙が過去において永遠でありかつそこに目的或いは終末なるものがあれば、それは永遠の昔に達成されていなければなるまい。
4. ところが事実はそれに反する。
5. 故に宇宙には目的なるものはない。

ニーチェが箇条1.「無神論が真理であれば……」を飛ばしたのは明らかである。無神論が真理であれば、宇宙には無論「始まり」も「終わり」もあり得ない。目的などあろうはずもない。

宇宙が過去において永遠で、しかも消耗や老化を免れていないのだとすれば、それは永遠の昔に損耗の極に達していなければなるまい。ところが消耗してはいないのである。終末を迎えたわけではないのである。ならば、結論は二つに一つである。第一の結論はこうである。「第一の仮説は誤謬である。宇宙は過去において永遠ではない」。第二の結論はこうである。「宇宙は過去において永遠であるが、そこには目的なるものがない」。

ニーチェは第一の仮説「宇宙は非被造なるが故に過去において永遠である」を真理と決めつけた。ならば、物理的宇宙が終末を迎えるはずはない。「熱力学第二原理」が宇宙や「自然」に適用されようはずはない。

すなわちフリードリヒ・ニーチェの考えはこの点ではフリードリヒ・エンゲルスのそれと一致する。

ニーチェが「熱力学第二原理」が提起する難問に対して物理学的解答を用意したのは確かである。

《宇宙は存続する。生成するものは皆無である。消滅するものは皆無である。否、宇宙は生成し消滅するのだが、生成し始めた例^{ため}しはなく、消滅し終えた例^{ため}しはないのである。宇宙は他ならぬ生成と消滅によって持ち堪^{こな}えるのである。宇宙は自力で存続する。排泄物を糧にして (Sie lebt von sich selber: ihre Exkreme^{te}nte sind ihre Nahrung)》(『遺稿』, éd. cit., p. 703)。

これが現代の無神論的宇宙論である。

ニーチェは己れの偏愛する偽推理^{みたび}に三度立ち戻る。

《宇宙が凝固し、凍結し、枯渇し、枯死し、無化する可能性があるとするれば、或いは平衡状態を現出する可能性があるとするれば、或いは何らかの目標すなわち合目的性を有するのだとするれば (……), その状態は現実化されていなければなるまい (……)。しかし事実はこれに反する。故に (……) (So müßte dieser Zustand erreicht sein. Aber er ist nie erreicht: woraus folgt……)

人間が把握している事実はこれに尽きる (Das ist unsre einzige Gewißheit, die wir in den Händen halten……)》(『遺稿』, éd. cit., p. 703)。

フリードリヒ・ニーチェがフリードリヒ・エンゲルスと同じ確信を持っているのは明らかである。両者はその理由 (敢えて言えば、その動機) をも共有している。両者は考える、無神論は真なり、故に (……) と。

《意味もなく、合目的性もなく、不可逆的に己れに立ち戻り、「無」となり果てることのないありのままの現存在。永遠回帰 (……) (Das Dasein, so wie es ist, ohne Sinn und Ziel, aber unvermeidlich wiederkehrend, ohne ein Finale ins Nichts: die ewige Wiederkehr……)》(『遺稿』, éd. cit., p. 853)。

《エネルギー保存の法則は永遠回帰を要求する (……)》(『遺稿』, éd. cit., p. 861)。

「エネルギー保存の法則」を宇宙全体もしくは全体としての自然に適用するためには、確かに、こう仮定しなければならない、一見不可逆的な損耗・衰弱・劣化を免れないものをも、始めの状態・始原 (つまり出発点) に回帰せしめ得るような、何らかのシステムがどこかに実在する、と。

果たしてそういうシステムが物理学的に考えられるのか。少なくとも想像されるのか。それが問題である。

「熱力学第二原理」すなわち「カルノー＝クラウジウスの原理」は、当然のことながら、19世紀末の哲学者を大いに苦しめた。20世紀フランスの主要な哲学者はそんなものは歯牙にも掛けなかった。

これを真剣に受け止めたのはアンリ・ペルクソンだが（『「カルノ＝クラウジウスの原理」すなわち物理学の原理中最も形而上学的な原理……』『創造的進化』, 1907 年刊）, 権威筋の受けは依然としてよくない。

VI. フリードリヒ・エンゲルス (1820-1895)

カルル・マルクスの盟友フリードリヒ・エンゲルスは 1875-1876 年頃に（つまりニーチェとほぼ同時期に）上記の問題に関する卓抜な見解を示した。

《「物理学」は「天文学」がすでに到達していた結論に到達した。すなわち、活動する「物質」の永遠の循環運動を必然的に証明することになる結論に（auf den ewigen Kreislauf der sich bewegenden Materie）》（『自然の弁証法』——「序文」, Dietz Verlag, Berlin, p. 16）。

エンゲルスは言う、物理学者と天文学者は 1875-76 年に上記の結論に到達した、と。ならば、両者は後にそれを忘失する^{のち}必要に迫られたことになる。

《永遠の河と循環運動の中で動く「全自然」(die Ganze Natur als in ewigen Fluß und Kreislauf sich bewegend……)》(同, éd. cit., p. 18)。

果してエンゲルスはニーチェや^{のち}後のマルティン・ハイデガーと同様にこう指摘する、現代人は遂にギリシャ哲学の根源に回帰したのだ、と。

《こうして現代人はギリシャ哲学の始祖の視点に再び立つことになった。その世界観に回帰した。全自然はやはり、「最小」から「最大」まで、砂粒から太陽まで、原生動物門からヒトまで、出現と滅亡の永遠の循環の中に実在しているのである。流れてやまぬ河の中に（……）。

ただし〔とエンゲルスは補足する〕彼我の相違もまた明らかである。ギリシャ人の天才的「直観」に対するに、現代人は経験的かつ純粹に科学的な探求によって「結論」に達したのである（bei uns Resultat streng wissenschaftlicher erfahrungs-mäßiger Forschung）》(同)。

エンゲルスは註記する（これで当人は面目を施したことになる）。

《なるほど、この循環運動 (Kreislauf) の実験〔科学〕的証明は完全無欠ではない。不備な点も散見する。しかし、確実に立証された事柄に比べれば、それは取るに足りないのである（……）。不備も年毎に補われよう（……）》(同, p. 19)。

引用文が書かれたのは 1875-1876 年である。

《或る太陽が〔とエンゲルスは問う〕動きを止め、亡ぶべきすべてのものの定めに従って死滅した時——その時には一体どうなるのか。太陽の残骸が無限の空間内を永遠に残骸として動き続けるのか（……）》（同，p. 24）。

1875 年にエンゲルスは云った、自分は空間の無限なることならびに時間の永遠なることを知る、と。一世紀後の現代人にはそんなことは知る由もない。エンゲルスは上記の問いにこう自答する。

《なるほど、それは「 $2+2=4$ 」のように、或いは「物質の引力は距離の二乗に反比例する」のように、明確に判っているわけではない》（同，p. 25）。

ここでエンゲルスの態度は一種の崇高さを帯びる。

《理論的自然科学は調和の取れた一全体の構築と獲得とを目指しているが、現に知られている数値には限りがあるとて、大いに警戒を要する。いつの時代も、「思考」の「論理」によって欠を補う必要があるのだ（der mangelhaften Kenntnis forthelfen müssen）。

さて、そこで、現代の自然科学は「運動不滅の原理」を採り入れることを余儀なくされたのである。つまり哲学に借りを作るはめになったのである。

この原理がなければ、現代の自然科学は存続し得ない。とはいえ、物質の運動は粗雑な機械的運動の域に止まるものではない。「移動」なるものに限定されるわけではない。物質の運動は「熱」でもあり、「光」でもあり、電磁張力でもある。「化合」や「解離」でもあり、「生命」でもあり、究極するところ「意識」でもある。

物質は、際限なく実在し続ける間中（während ganzen zeitlos unbegrenzten Existenz）、己れの運動を分化せしめ、かつそれによって運動の多様性を完全に展開する可能性の中で、ただ一度だけ、しかも「永遠」に比べればほんの束の間存在しただけであると云えば、つまり物質〔の運動〕はそれ以前もそれ以後も永遠に「移動」にのみ限定されているのだと云えば、「物質」は滅ぶべきものであり、かつ「運動」は終息すべきものであると云ったも同然である。「運動」の不滅性を単に量的な意味でのそれに限定してはならない。「運動」はまた質的にも不滅であると考えねばならない。ただ機械的に移動しているうちに、自ずから熱となり、電気となり、化学的に作用し、生命になるが、にもかかわらず、そういう条件を独力で生み出す（diese Bedingungen aus sich selbst zu erzeugen）状態にはない「物質」なるもの、——そういう「物質」は運動を失っているのである。己れ固有の様々な形に己れを変える能力を失ってしまった運動

もまたなるほどデュナーミス（アリストテレス）ではあろうが、そこにはもはやエネルゲイアはなく、従って、そういう運動はまさにこの事実によって部分的に破壊されているのである。いずれの場合も思考不能である（Beides ist undenkbar）》。

何故に思考不能なのか。フリードリヒ・エンゲルスの論理を整理してみよう。

（一） 無神論が真であれば、物理的宇宙は「存在」である。つまり「存在」全体であり、絶対的な意味での「存在」である。

（二） 従って、物理的宇宙は過去と未来のいずれにおいても永遠でなければならない。つまり不朽でなければならない。

（三） 物理的宇宙を構成する「物質」は、それ故、宇宙に出現したもののすべてを、つまり生命をも思考をも、独力で産出する（aus sich selbst）他はない。

（四） ところで、無神論は真である。故に熱力学第二原理は「存在」すなわち宇宙と自然には適用されない。「存在」は不朽である。

エンゲルスは原理として立てられた無神論から物理学的諸法則を演繹する。デカルトが我流の形而上学から物理学的諸法則を演繹したように。

読者はそこに観念論哲学の方法を利用する理論的唯物論者の姿を認める。

フリードリヒ・エンゲルスは、極めて当然のことながら、読者が二者択一を迫られていることを強調する。

《いずれかを選ばねばならぬ（Entweder……oder……）。とにもかかわらず「創造主」〔おぞましきもの〕に御登場願うか、それが厭なら、白熱した原初の「物質」は、自然に、つまり、本質的に運動状態にある「物質」特有の変形によって、産出されたものだという結論を受け容れる他はない。「物質」が変形するための諸条件は、たとえ何百万年後であろうとも、まるで偶然でもあるかのように、とはいえ偶然に内属する必然性によって、再び整うはずだ、と》（p. 26）。

大変結構な推理である。宇宙は被造物であるか否か、ふたつにひとつである。被造物であれば、宇宙は宇宙が独力で産出するのである。ところで、宇宙は被造物ではない。故に宇宙は宇宙が独力で永遠に産出するのである、云々。

とはいえ、残念ながら、自己を産出する物質ないし宇宙なる観念はどう考えても無意味である。いかなる存在にも自己を産出する可能性はない。自己に存在を付与するためには、付与する存在がすでに存在していなければならない。既存の人間が己れに存在を付与しようとしても、すでに手遅れである。

以上が「運動不滅」（die Unzerstörbarkeit der Bewegung）説である。

《こうして筆者は以下のような結論に達する〔とエンゲルスは云う、p. 27〕。すなわち、宇宙空間に放射された熱は己れを他の運動形態に変化せしめる能力を所有しているはずである (die Möglichkeit haben muß), と (その過程については、今後の科学的探究や自然研究に俟たねばなるまいが)。

のみならず〔とエンゲルスは付言する〕、無限の時間内で永遠に繰り返して生起する「諸世界」は無限の空間内に共存する無数の「諸世界」の論理的帰結ないし結実に他ならない……

物質の永遠の循環運動なるものが実在するのである (Es gibt ein ewiger Kreislauf, in dem die Materie sich bewegt) (p. 27)。「物質」, 「太陽」, 動物, 動物種^{しゅ}等の実在様態は, そういう循環運動の中で, いずれも忽ちのうちに滅びるのであり, 永遠に己れを変形しかつ永遠に運動し続ける「物質」と当の「物質」の変形ならびに運動を司る「諸法則」とを措いて他に永遠なるものはない……。

しかし「循環」はまたしばしば無情にも「時間」と「空間」の中でも生起する。……筆者は確信するのだが (wir haben die Gewißheit), 「物質」はいかに変形しようとも永遠に同一性を保ち, その属性はどれひとつとして消失し得ないのである。なるほど「物質」はその最高の精華である「思考する精神」を必然的に地球から奪い返すのだが, しかし同じ「物質」がこの「精神」を, 他ならぬその非常な必然性を以て, 再び, 「場」と「時」を変えて産出するはずなのである……》。

読者も先刻お気づきの通り, エンゲルス説は唯物論に編曲されたスピノザ主義である。エンゲルスはスピノザの所謂「実体」を「物質」の名で呼ぶ。単一「実体」は「自然」に等しい。故に〔とエンゲルスは云う〕「自然」は非被造であり, 過去ならびに未来において永遠である。つまり不磨にして不滅である。「熱力学第二原理」を「自然」に適用してはならない。確かに「自然」の内には生成と死がある。とはいえ, 物質的宇宙に出現するもののすべてを産出もしくは出産したのは他ならぬ永遠かつ非被造の「物質」である。「生命」も「思考」も例外ではない。それは単一「実体」すなわち永遠かつ非被造の「物質」の「変様」せるものに他ならない〔云々〕。

これは明らかにギリシャ最古の形而上学者の問題の焼き直しに過ぎない。〔すなわち〕「物理的宇宙が絶対としての『存在』であれば, そこには『始まり』も『終わり』もなく, 進化・生成・老化・損耗もまたあり得ない。故に宇宙における可視的生成と腐敗のプロセスは錯覚ないしは仮象である。さもなければ宇宙は循環系なのである」〔云々〕。

論理の方向を急激に転換したのはアリストテレスである。曰く,

《思弁は大いに結構。だが, 思弁^{かこ}の推理に託つけて経験に逆らうのは狂気の沙汰 (mania) である》(『生殖と腐敗について』, 325a)。

要するに、経験に基礎を置くのか(アリストテレスの方法)、好悪で判断するのか(現代人の方法)、それが問題である。先決すべきは思考方法の問題である。思考と存在との関係の問題である。先験的思考に依存するのか、存在するもの(経験)に密着した思考を巡らせるのか、それが問題なのである。

VII. マルティン・ハイデガー (1889-1976)

マルティン・ハイデガーは古代インドの最古の聖典にまで溯る巨大な敬すべき観念論的宇宙論的伝統の継承者ではない。ギリシャ最古の形而上学者の説にまで溯る巨大な敬すべき唯物論の流れに棹さず者でもない。無論ヘブライの伝統を守る者でもない。その意味で、ハイデガー哲学は興味深い哲学である。その意味するところを見よう。

《そもそも何故に存在者が存在するのか。むしろ無が存在するのではないか》(Warum ist überhaupt Seiendes und nicht vielmehr Nichts?)。マルティン・ハイデガーは1935年にフライブルク・イン・ブライスガウ大学で用いた講義録を『形而上学入門』(*Einführung in die Metaphysik*)と題して公刊する。上記の一文は著者が同書中で提出した問題である。著者は付言する、これは全問題中、第一の問題である、と。

これは実はアンリ・ベルクソンが1907年に『創造的進化』の中で論じた問題である。ベルクソンはこういう問題提起の無意味さを指摘する。提起された問題が、「何もないのかもしれない」という「無の可能性ないしはその思考不可能性」を前提とした問題だからである。絶対無は何人によっても思考されない観念である。事実、何人もこれを思考した例はない。何ものかが必然的に存在するという単純な理由によって、これは現に思考され得ない観念である。ベルクソンは以上のことを論証する。何ものかが必要〔必然的〕である以上、「何ものも実在しない可能性」なるものは何人によっても思考され得ない。それを臆げに意識したのはカンタベリーのアンセルムスである。

何らかの存在が必要〔必然的〕なのである。従って、いかなる存在も必要〔必然的〕ではないとか、すべては偶然であるとかいう考え成り立たないのである。

ハイデガーは考える、上記の問題はあらゆる存在に関して提起されるのだ、と(p.2)。

《それ〔この問題〕はどんな種類の存在者に関しても提起されないことがない(Sie macht bei keinem Seienden irgendwelcher Art halt)。この問題は全存在者を包括する(Die Frage umgreift alles Seiende)〔……〕。無ならざるものはすべて、否、遂には無にしてからが、この問題に捕えられる(Alles was nicht Nichts ist, fällt in die Frage, am Ende sogar das Nichts selbst)》。

ハイデガーは主張する、「必然的存在などは実在しない。いかなる存在も必然的ではない。無と

化する〔非＝存在化する〕はずのない存在なるものは存在しない」と。ハイデガーはカンタベリーのアンセルムスとは反対の立場を取る。それは当人の自由である。ただし1935年現在において、ペルクソンによる「絶対無の概念」批判についてしらを切るのは紳士的な態度とは云い兼ねる。

マルティン・ハイデガーは考える、いかなる存在も必然的ではない、と。これは純粋な無神論である。ならば、こう問い返してもよい。何故に無よりもむしろ存在者が現に実在するのか、と。何らかの存在が必然的であれば、ハイデガーの問いは完全に無意味なものとなる。

少なくとも二千五百年の伝統を有する巨大な敬すべき唯物論に従えば、ともかくも何らかの存在は必然的である。物理的宇宙すなわち「コスモス」なるものがそれである。物理的宇宙は非被造の神であり、「始まり」がなく、進化・歴史・損耗・老化・滅亡から自由である。物理的宇宙は「存在」〔自体〕であり、他に存在なるものはない。

ハイデガーはこういう哲学的伝統に背を向ける。この哲学者は12年間神学生生活を送った。神学校では、物理的宇宙が必然的「存在」ではないことを教わった。物理的宇宙とは別のものが必然的「存在」なのである、と。

ところが、ハイデガーは無神論者になった。それは当人の自由である。ハイデガーは考える、一神教の形而上学者が40世紀の長きに亘って説き続けた「別のもの」などは実在するものではない、と。

物理的宇宙は必然的「存在」に非ずということになれば、誰もがこう自問する権利を持つ。否、その義務を負う。物理的宇宙は何故に実在するのか、と。ところがハイデガーはこの問題〔何故に実在するのか〕を（当人の云い方に従えば）あらゆる存在に関して提起する。ところで、この問題を神に関して提起して、神は「実在しないのではなくして」何故に実在するのかと問う者、つまり「実在しないよりもむしろ」何故に実在するのかと問う者はこう考えているのである。すなわち、神もまた偶然的存在であり、実在しない可能性があるろう、と。神もまた偶然的諸存在の範疇もしくは集団に属するのだ、と。つまり必然的存在が皆無であるのは神が存在しないからであると、そうハイデガーは信じて疑わないのである。

《この問題は〔とハイデガーは云う〕全存在者 (das ganze Seiende) に関して提起される。〔つまり〕存在者全体そのもの (das Seiende im Ganzen als ein solches) 〔に関して〕》(p. 2)。

ハイデガーはつまりこう考えているのである、存在は例外なく同一の集団に組み込まれるが、それは自分の観点からすれば当り前のことである、というのは、私見によれば、「在りて在る者」(『出エジプト記』3, 14)と自称し得る「存在」〔自体〕が実在するわけではないのだからである、と。

優れたスコラ学者はこういう理屈が成り立たぬことをよく知っていた。そもそも『我在り』(在りて在る者)が汝等に——また汝等以外の全存在者に我を与えん」と語り得る「御方」^{おんかた}を、「唯一者」を、同一の集団に組み込むのは無理である。人間は同一の集団に含まれているわけではない。

理由は他でもない、「唯一者」が(聖トマス・アクィナスの表現に従えば)自存せる存在行為(actus essendi per se subsistens)であるのに対し、人間の方は「己れの実在(または存在)行為」ではなくて、「実在すること(または存在すること)」を受け取る者なのだからである。

ハイデガーは考える、この語りかける「存在」なるもの(『出エジプト記』3, 14)は現実には実在しない、と。ならば、問題は消滅する。存在は例外なく同一の集団に組み込まれるのだから。

存在が例外なく同一の集団に組み込まれるのだとすれば、存在(する)という語はいかなる存在にあっても同じ意味を持つことになる(所謂存在の一義性)。ならば結論は二つに一つである。「存在はすべて必然的であり、『全』である宇宙は必然的存在である」(唯物論者は一貫してそう考えている)。或いは、「存在がすべて偶然であるとは考えられない。そんなことは考えられない。すべてが無から独力で生起し(出現し)かつ消滅する(再び無に戻る)とは考えられない。存在が例外なく無或いは非=存在から独力で出現するとは考えられないからである。実際、偶然的存在のすべてが絶対無もしくは存在の全否定から独力で生起するとは考えられない。故にこう云わざるを得ない。どこかの何らかの存在が必然的であり、それは過去ならびに未来において永遠である、と」。

とはいえ、存在のすべてが必然的であるとか、「全」である物理的宇宙が必然的であるとか云うわけにも行かない。存在〔者〕はすべて実在し始めるのだからである。生起し、消滅するのだからである。実在し始めた存在はすべて、宇宙にあつては、生成・老化・損耗のプロセスなのだからである。

形而上学者のすべては、晚くとも30世紀前には、こう考えていた。少なくとも或る一つの存在は必然的である、と。何らかの存在は必然的である、と。古代インドの主要な観念論的・無宇宙論的伝承によれば、この非=実在たり得ぬ絶対存在とは、永遠の昔から実在するブラフマンである。紀元前6世紀のギリシャに遡る巨大な唯物論の伝統を受け継ぐ者に云わせれば、非被造の不滅の神である必然的「存在」とは物理的宇宙に他ならない。紀元前20世紀にまで遡るヘブライ人の伝統的な観点からすれば、何らかの絶対存在が存在する。それは世界ではない。物理的宇宙ではない。そういうものではない。それとは別物である。

ハイデガーは上記の三種の形而上学をお払い箱にする。それがこの哲学者の何とも風変わりなところである。

ハイデガーは問題点を明らかにする。

《そもそも何故に存在者が存在するのか(Warum ist überhaupt Seiendes?).つまり、存在者の根源(der Grund)とは何か。存在者は何に由来する〔いかなる根源から来る〕のか(aus welchem Grunde kommt das Seiende?).存在者は何に依拠している〔いかなる根源から来て存立する〕のか(auf welchem Grunde steht das Seiende?).存在者はいかなる根源へと向かう〔最後にはどうなる〕のか(zu welchem Grunde geht das Seiende?).(……)これは飽く

までも現に存在している存在者の根源を尋ねる問いである (Das Fragen sucht den Grund für das Seiende, sofern es seiend ist)》。

ハイデガーは公然と問う、〔存在者の〕根源 (der Grund) とは原＝根源〔根本＝原因, Ur-grund〕なのか、脱＝根源〔Ab-grund, 深＝淵〕なのか、本来的非＝根源〔非＝存在, Un-grund〕なのか、と。

つまり読者は、古代エジプトの、シュメールの、アッカドの、カナンの古い神話 (神統記と宇宙開闢説) に付き合わされるはめになる。世界の、神々の、否「全〔体〕」の源には本源的な混沌^{カオス}が実在するのだと説くあの神話に。後にこの問題を取り上げたウァレンティヌス派のグノーシス主義者は云う、「全〔体〕」の源には沈黙という深淵が実在するのだ、と。

ところでハイデガーは自問しているのだろうか。この本源的深淵 (Grund, Ur-grund, Un-grund) の実在をいかにして把握するべきか、と。この本源的深淵は何故に「実在しない」のではなくして「実在する」のか、と。蓄積された経験のすべてを放棄して、原＝根源 (Ur-grund) であり (恐らくは) 本来的非＝根源 (Ur-grund) である根源 (Grund) なるものを持ち出すことによって何が手に入るのか、と。ハイデガーは繰り返して云う (p. 3)、問われているのは全〔体〕としての存在者自体 (das Seiende als solches im Ganzen) である、と。

ハイデガーは続ける (p. 5)。

《例えば、聖書に神の啓示と真理を見出す者は「そもそも何故に存在者が存在するのか。むしろ無が存在するのではないか」と問う前に、問い方の如何に拘わらず、予め答えを出しているのである。「存在者」(das Seiende) は、当の存在者が神自体でない限りは、神の創造物である。神自体は非＝被造の創造者として『存在する』という答えを》。

ハイデガーは人をからかっているのだろうか。それとも聴講生を愚弄しているのだろうか。つまりフライブルク・イン・ブライスガウ大学の哲学科の学生を。

「何故に無に非ずして、非有に非ずして、むしろ存在者が存在するや」という問いには意味がない。何故なら、これは全存在の否定すなわち絶対無の可能性を前提とした問いなのだからである。ところで全存在を否定するのは無理である。そんなことは考えられないし、かつて誰一人として考えた者はいない。理由は簡単で、絶対無すなわち全存在の否定からはいかなる存在も実在し始めるはずはないのだからである。故に何らかの存在が恒常的に実在したのである。

聖書にはそういう無意味な問題に関する考察はない。ハイデガーの言う通りである。ヘブライ人は非＝被造の絶対「存在」と物理的宇宙とを一貫して区別する。後者は絶対「存在」でもなければ「存在」の全一性でもないのである。しかしそれを「真」と判断するのは、ハイデガーの言う聖書なるものにかかれていないからではない。図書館に実在する一冊の書物に書いてあるからで

はない。宇宙ならびに自然にあってはすべてが確かに存在もしくは実在し始めるのである以上、宇宙も自然も過去ならびに未来において永遠である必然的「存在」なるものではないという事実を、知〔解〕性が所与の分析によって発見するのだからである。

ハイデガーは続ける。

《そういう信仰 (Glauben) に依存する者は (……) 実は信仰者たるを (einen Gläubigen) 失わずしてこの問いを発するには至らないのである (……)》。

誤解と混乱が更に深まる。——一神論者たる形而上学者は「何故に無よりも存在者が存在するのか」とは問わない。ベルクソンと同様に、これを馬鹿げた問いと見做しているからである。これは絶対「無」の可能性を前提とした問いなのだからである。これは思考し得ぬ仮定である。

一神論者たる形而上学者は巨大な敬すべき唯物論の伝統に抗してこう考える。宇宙は絶対「存在」すなわち「存在」の全一性すなわち絶対的な意味での「存在」ではない、と。そう考えるべき根拠があるからである。ハイデガーには福者ヨハネス・ドゥンス・スコトゥスを論じた哲学博士論文がある。ならば優れたスコラ哲学者の著作も少しは読んだ経験があるに相違ない。アルベルトゥス・マグヌス、アレクサンデル・ハレシウス、ボナヴェントゥラ、トマス・アキナス、ヨハネス・ドゥンス・スコトゥスならびにその他のスコラ哲学者がどう考えているかはその著作を読めばわかるはずである。「宇宙は自足した存在ではない」。「それは被造物であって、絶対『存在』ではない」。これがスコラ哲学者の考えである。ハイデガーが聖書と呼ぶ書物にそう書いてあるからそう考えるのではない。合理的・形而上学的分析の結果そういう結論に達したが故にそう考えるのである。スコラ哲学者は丸々数章を費してこの問題を論じているのだから、それを一読すれば得心が行くはずである。実際そこには「信仰」の付け入る隙はない。ハイデガー教授は聴講生に信じ (glauben) 込ませたのである。一神論者たる形而上学者は「創造」なるものが一冊の書物に書いてあるが故に「創造」説を奉じているのだ、と。つまり担いだのである。これは確かに馬鹿げた話であろう。

キリスト教徒たる形而上学者は件の問題を形而上学的に分析した。その結果「創造」論は「真」であると考えに至った。ヘブライの無名の神学者もまた「創造」論を発見するのに分析を以てした。「創造」論を考え、やはり分析を行なったのである。この理論を奉じるに足る根拠があったのである。靈感は知〔解〕性の代用品にはならない。前者の役割は後者の活動力を刺戟し、事実これを活動せしめるにある。人間の知〔解〕性は早くも最初の「啓示」を受けた時から活動力を発揮し、今も知解して已まない。すなわち、古代ヘブライの無名の神学者にとって、「創造」の問題は「信仰」(glauben)のそれではなくして、「認識すること」(iada)と「知解〔すること〕」(binah)のそれなのであった。

マルティン・ハイデガーはそんなことは気にも留めなかった。ドイツの思想家は幾世紀も前か

らヘブライ人の思考を見下していた。そんなものはマルティン・ハイデガーには無いも同然だった。ギリシャ思想とドイツ思想の他は眼中になかった。

フィヒテとアルトゥル・ショーペンハウアーによれば、ヘブライの思考は悪しき思考である。ハイデガーにとっては無いも同然である。

「^{はじめ}元始に神天と地を創れり」という命題と「何故に無よりもむしろ存在者が存在するのか」というハイデガーの提出する問題には交点がない。それに関するハイデガーの判断は正確である (p. 6)。聖書の上記の命題は、信仰にとって (für den Glauben) 「真」であると「偽」であるとに拘わらず、いかなる意味においてもハイデガーの問題に対する答えにはなり得ない。ヘブライ思想は非＝被造の「存在」と被造の存在とを一貫して区別する。そして、何らかの存在が必然的〔必要〕であると考ええる。この考えは全形而上学に共通する。古代インドのそれにもギリシャの唯物論にも。他に考えようがないからである。しかしヘブライの形而上学は、必然的「存在」に関して、「何故にそれは非＝実在であるよりもむしろ実在であるのか」との問いを含んではいない。何故なら、この問いは、「必然的『存在』は必然的〔必要〕ではない」、「必然的存在は実在しない」、「全存在、存在の全一性、全一性としての存在は偶然的である」という仮定に基づく問いなのだからである。事実、これを思考し得た者はどこにもいないのである。

ハイデガーは言う、「何故に無よりもむしろ存在者が存在するのか」と問うのは、信念なるもの或いは信仰なるものに悖る愚行である、と (p. 6)。否、そうではない、信仰の問題などではない。信仰に悖る愚行なるものではない。理性に悖るそれ、理性に反する不可能事である。

聖書はハイデガーが提起した問題（「何故に無よりもむしろ存在者が存在するのか」）を提起しない。理由は至って簡単で、聖書は全存在を一括りにすることがないからである。そんなことは不可能だからである。実際、全存在を、偶然的と仮定された諸存在全体として一括するわけには行かない。そんなことは不可能だからである。全存在が偶然的存在であるはずはない。聖書は全存在を「必然的存在と仮定される存在」なるものとして一括するわけではない。これまた経験上不可能なことだからである。宇宙ならびに自然は生成し消滅するが故に必然的存在なるものではない。宇宙は不断の生成と老廃とを免れない。従って、それは必然的存在ではない。

つまりハイデガーが提起する問題は、当人の考えに反して、信仰に悖る愚行なるものではない。問題の論理的分析に反するそれである。

ハイデガーは続ける (p. 6)。

《哲学は専らこの愚行を事とする。「キリスト教哲学」なるものは木製の鉄〔矛盾〕である。一箇の誤解である。〔……〕哲学は生っ粋のキリスト教信仰に悖る愚行である。〔改行〕「哲学する」とは他でもない、「そもそも何故に存在者が存在するのか。むしろ無が存在するのではないか」と問うことである》。

カントの後裔であるハイデガーはこう考える、神の实在の問題は信仰(Glauben)のそれである、と。また、世には、ハイデガーと同様に、こう考える向きがある。宇宙の創造の問題は信仰のそれであって、所与の合理的分析の対象にはならぬ、と。「創造」信仰なるものは一冊の書物の記載事項に基づくものである、と。なるほど、そう考え、それを認める限り、キリスト教信仰なるものはあり得ない。

しかし一神教を奉じる形而上学者はそう考えたわけではない。創造主である神の实在の問題は客観的現実すなわち宇宙と自然に根差した合理的分析の対象であるというのがその考えである。ならば、そこはハイデガーの言う「信仰」(Glauben)なるものの出る幕ではない。聴講生は誤魔化されたのである。

ハイデガーの言によれば、偶然的諸存在と唯一の必然的存在(仮にそれが实在するとすれば)とを存在という語で一括した上で(すでにこの仮定自体が成り立たぬわけだが)、さて「何故に無よりもむしろ存在者が存在するのか」という馬鹿げた問いを発するのが哲学の役目だということになる。仮にハイデガーの言い分を認めるとすれば、キリスト教哲学なるものは成立しない。およそ哲学なるものが成立し得ないのだからである。実は实在の論理的分析を哲学と言う。实在の破壊者は同時に哲学の破壊者である。

ライプニッツは問う、「無よりもむしろ何ものかが实在するか」(quod aliquid potius existit quam nihil)と(「諸事物の根源について」*De rerum originatione radicali*, 1697年11月23日, *Die Philosophischen Schriften*, éd. Gerhardt, VII, p. 303)。この問い方は正しい。ライプニッツは先ず始めに以下の事実を論証する。

《宇宙すなわち有限物の総体の外^{ほか}に (praeter Mundum seu Aggrgatum rerum finitarum), 「一」なる支配者なるものが与えられている〔存在〕する (datur Unum aliquid Dominans)。ちょうど、自我の内に魂が与えられているように。或いはまた、我が身体の内^{とど}に自我自体が与えられているように。のみならず、「一」なる支配者はそういうものよりも遙かに超越的に与えられている。宇宙を支配する単一「存在」は単に宇宙を規定するに止まらず、後者を製作または製造するのである。それは超宇宙的である。つまりそれは諸事物の窮極的〔存在〕理由〔根拠〕である。何故なら、十分な实在の根拠 (sufficiens ratio existendi) は個々の存在者のいずれにも見出されないばかりか、存在者全体にもその全系列にも見出されないのだからである。たとえ不滅の宇宙を想像しようとも、たとえ宇宙の不滅性を仮想しようとも、諸事物の窮極的・超=宇宙的理由〔根拠〕すなわち神を避けて通るわけには行かない。これを逃れるわけには行かない。宇宙の〔存在〕理由〔根拠〕は宇宙とは別の何らかの存在の内^{とど}に隠れている。つまり諸状態の連鎖もしくは諸事物の系列(これを総合したものが宇宙である)とは異なる何らかの存在の内^{とど}に。ならば絶対不可欠の〔絶対に必然的=必要な〕存在つまり説明し難い形而上学的存在へと赴く他はない。現存する宇宙は絶対的つまり形而上学的に必然的なものというわけ

ではない。その窮極因は形而上学的必然性を以て実在する何らかの存在でなければならない。実在する任意の存在者の存在理由〔根拠〕はまさしく実在する何らかの存在の内にある。ならば、形而上学的に必然的な単一「存在」つまり実在〔すること〕を本質とする「存在」(Ens unum metaphysicae necessitatis seu de cujus essentia sit existentia) が実在することになる。つまり数多性としての諸存在すなわち宇宙とは異なる何らかの存在が実在することになる。宇宙の方は、既述のように、形而上学的必然性を以て実在するわけではない。

従って、「無よりもむしろ何ものかが実在するというまさにこの事実によって」(eo ipso, quod aliquid potius existit quam nihil) と書いたライプニッツは「存在」一般の実在という事実の解釈を世に問うたのではない。断じてそうではない。必然的に実在しかつ実在〔すること〕を本質とする「存在」の実在を論証したのだからである。他ならぬこの「存在」を問題にするわけには行かない。そんなことをすれば、この「存在」の非＝実在の可能性ならびに(延いては)その偶然性と非＝必然性をも仮定するはめになるからである。ライプニッツは非＝必然的宇宙の実在を如何に解するべきかと問う。故にその問い方は正しい。推論する〔理性を行使する^{すべ}〕術を知っていたのである。ライプニッツは宇宙が実在するに至る理由を問い、存在一般すなわち全存在が実在するに至る理由は問わない。

ライプニッツは必然的な単一「存在」と物理的宇宙を構成する存在全体とを区別する。後者に関しては、誰にでもこう問う権利が十分にある。否、その義務さえある。「必然的ではないはずの後者が如何にして実在するに至るのか」と。とはいえ、必然的「単一者」と物理的宇宙とを一括するわけには行かない。そんなことをすれば、後者の必然性なるもの(25世紀以上も前に遡る唯物論者の説)が仮定されるはめになるからである。或いは、『「単一者」と物理的宇宙の非相違性と両者の偶然性」ならびに「必然的『存在』の非＝実在」なるものが仮定されるはめになるからである。実はこれが他ならぬハイデガーの説である。

「創造」の教義または理論は文字通り形而上学的なそれである。更に言えば、存在論的なそれである。この点については議論の余地はない。「創造」論に従えば、物理的宇宙は絶対「存在」でも全一性としてのそれでもない。ともかくも絶対的な意味でのそれではない。物理的宇宙はそれ自体とは別の何らかの存在に依存する存在である。

「創造」論は「真」または「偽」である。それを論証するのが分析なるものの役目である。マルティン・ハイデガーのように、「創造」論は信仰(Glauben)の問題であると主張もしくは教授するのは非常識の極みである。如何なる形而上学理論も決してカント的な意味での信仰問題などではあり得ない。形而上学とは、定義上、経験的所与の分析なのだからである。

だからハイデガーは以下のように巧妙に話を進めるのである。

1. ヘブライ人の論理ならびにキリスト教徒のそれは信仰(Glauben)問題である。故にそれは

哲学的考察の対象にはならない。

2. 従って、真の存在論は同理論とは逆の(またはそれに反する)理論である。ヘブライ人ならびにキリスト教徒の理論に従えば、物理的宇宙は絶対「存在」もしくは絶対的な意味での「存在」ではない。また、絶対「存在」すなわち独力で自存する行為自体 (*ipsum actus essendi per se subsistens*) と宇宙の存在とは区別されねばならぬ。同理論は信念もしくは信仰 (*Glauben*) の問題であるから、正攻法で行く存在論が良い存在論であるということになる。一種類の存在を措いて他に存在なるものはない。当然のことながら、それは物理的宇宙である。まさにギリシャの最古の形而上学者等が考えていた通りである。

詭弁または偽推理は誰の眼にも明らかである。試みに、ハイデガー教授と共に、「創造」論は信念または信仰 (*Glauben*) の問題であると仮定してみよう。無意味なことではあるが、^{ため}試みにそう仮定してみよう。ならば「創造」論は実際哲学的考察の対象にはならない。被造の存在と非=被造のそれとの違いは哲学的考察に基づくものではない。両者の相違の問題は哲学のそれではない。

ならば、こう結論を下しても差し支えないのであろうか。現実には一種類の存在を措いて他に存在なるものは実在せず、従って、物理的宇宙は、ギリシャの最古の哲学者等が考えていた通り、絶対的な (*haplôs*) 存在以外の何ものでもないのだ、と。

とんでもない。ヘブライの「創造」論が信念または信仰の所産であるか否かという議論には何の意味もない。非=被造の存在と被造のそれとの区別が信念または信仰の問題であるか否かという議論には何の意味もない。故に、問題は手つかずで残されるのである。物理的宇宙は、ギリシャの最古の哲学者等が考えていたように、真に絶対「存在」であるのか。この存在は真に唯一の存在であるのか。これが問題である。

問題はこれに尽きるのである。論じるべき問題はこれなのである。ハイデガーはそれを論じようとはしなかった。その労を取らなかった。話を以下のように進めたのだからである。すなわち、「創造」論は信仰問題である。故に、「『宇宙』は絶対的な意味での『存在』である」という逆の理論(もしくは反「創造」論)が正論である。宇宙は非=被造なのである、と。

明らかな偽推理である。ハイデガーは大多数のドイツの哲学科の学生を欺いたのである。次いでフランスの読者を。

但し、幸いにして、誰もが欺かれたわけではない。アウシュヴィッツで死んだ聖エーディト・シュタインは推理する〔理性を行使する〕^{すべて}術を知っていたし、12年間の神学生生活を送った同僚のハイデガーの偽推理に誑かされることもなかったのである。

ハイデガーは言う、宇宙は非=被造である、と。スピノザ、フィヒテ、ニーチェ等は言う、「創造」論は馬鹿げているが故に宇宙は非=被造である、と。ならば、宇宙は必然的存在すなわちスピノザの言う「実体」である他はない。宇宙が非=被造であれば、スピノザ主義以外の何が考えられようか。

すなわち、ここにハイデガーの更なる矛盾点がある。当人は言う、「創造」論は馬鹿げているが故に宇宙は非＝被造である、と。にもかかわらず、「故に『宇宙』は必然的『存在』である」との結論はこれを忌避するのである。これこそが上記の仮定の必然的帰結であるというのに。ハイデガーはそういう結論を忌避する。宇宙は必然的「存在」であるとは言わない。「何故に無よりもむしろ何ものかが実在するのか」と問うた以上、そんなことは言わないのが当たり前である。この問いは、「宇宙は必然的ではない」との仮定に基づく問いである。ハイデガーによれば、宇宙は必然的ではない。何故なら、宇宙の実存なるものは喫驚して然るべき事象なのだからである。宇宙は実在しない可能性もあろう。故に宇宙は偶然的〔存在〕である、と。

マルクス主義哲学者はハイデガーを論難する。同主義者は正統スピノザ主義の系列に属する。曰く、宇宙もしくは「自然」は「存在」であり、これを措いて他に「存在」なるものはない。故に宇宙は必然的かつ非＝被造であり、過去と未来とにおいて永遠であり、不磨である。宇宙が必然的「存在」であれば、「何故にそれは非実在であるよりもむしろ実在であるのか」と問うべき理由はない。この問いは無意味である。絶対無なるものは考えられぬものだ、と。

カンタベリーの聖アンセルムスは分析によって絶対「存在」の実在を発見し、その非実在は何人にも考えられぬものと言ったが、スピノザ主義者とマルクス主義者は宇宙について同じ言葉を口にする。

「創造」の問題とは裏を返せば「物理的宇宙は被造か非＝被造か」の問題に他ならない。「パルプ・デ・スピノザ、ヨーハン・ゴットリーブ・フィヒテ、カルル・マルクス、マルティン・ハイデガー等は被造か非＝被造か」の問題である。その答えは断じて恣意的選択の対象にはならない。好悪の問題ではない。19世紀ならびに20世紀の神学生^あ上^わがりの著名人、別けてもエルネスト・ルナン、チャールズ・ダーウィン、マルティン・ハイデガー、ヨゼフ・スターリン等は「創造」論もしくはその教義を毛嫌いしていた。それはそれでよい。しかし好悪の問題は形而上学の与り知るところではない。それは心理学の領分である。現代人の知る唯一の方法によって、つまり合理的方法によって、すなわち実験的方法・科学的方法によって「存在するもの」を探求するのが形而上学の役目である。

ならば、自我、主観性、内面性などから出発してはならない。却って、現代人の知る物理的宇宙から出発して、こう問わねばならない。200億年ほど前から生成と予見し難い連続的創造によって秩序づけられているこの宇宙が絶対的な意味での「存在」であると本気で主張し得るのか、と。物理的宇宙は己れの持たざるものを、すなわち存在を、また、宇宙と自然の歴史の中で眼に見える形で開花し結実したもの^のすべてを、己れに与え得るのか、と。物理的宇宙による自己産出(Selbst-erzeugung)なる観念は何らかの意味を持っているのか、それともそれは無意味な戯言なのか、と。

問われるべきは上記の問いである。過去の心理的経緯を忘れるべく努め、かつ客観的に論じるべきは上記の問題である。それでもなお、宇宙は永遠の体系であるとか、己れの排泄物を喰って

生きる循環的混沌^{カオス}である（ニーチェ）とか口走る者があるとすれば、それは当人がかつて神学生だったからではない。

ニーチェとハイデガー以後の哲学は主観的である。両者に学んだ多数のフランス人のそれもまた然り。〔哲学と言うよりも〕それは長大な自伝の観を呈する。或るドイツの学者は言った、グノーシスは宇宙論に転化された心理学である、と。ニーチェ以後のドイツ哲学ならびに（当然のことながら）フランス哲学についても同じことが言える。それは哲学に転化された心理学である、と。そういう哲学が青年たちの間で好評を博したのも故なきことではない。実証諸科学は所与の論理のかつ合理的分析に邁進する。それはもっと味気ないものである。それはアリストテレスの方法である。

今日、フランス哲学を牛耳っているのは、ニーチェ、ハイデガー等の弟子たちであるが、そういう人々が拒んでいるのは他でもない、宇宙という所与の客観的かつ合理的な分析である。そんなことよりも、幻想、神経症、精神病、取り留めのない独り言を言う人格構造、南米のどこかの部族における血縁関係の基本構造などを調べていた方がずっとましだと考えているからである。そもそも、宇宙もしくは自然という所与とその全内容の合理的分析などをやれば、どんなことになるか、どんな結論が出て来るか、分ったものではないからである。〔そういう人々は考える〕慌ててはならぬ。方向を変えた方がよい。宇宙とその歴史を科学的かつ合理的に調べ出したら、どういう結果が出るか、分ったものではない。まあ、やめておこう〔と〕。

スピノザ、フィヒテ、カルル・マルクス、アルトゥル・ショーペンハウアー、ニーチェ、ハイデガー等が許容しないのは、他でもない、創造による実在なるもの、すなわち存在の贈与による実在なるものである。

贈与もしくは創造の結果としての実在なるものを否定するのにも幾通りかの遣り方がある。こう仮定してもよい。人間は実は絶対存在なのだが、誰もがそれを忘れてしまったのだ、と。己れが実は「絶対」と同一であることを発見するためには秘儀伝授を受ければよいのだ。そうすれば、誰もが過去における己れの永遠の実在をも未来におけるそれをも確信するに至るのだ、と。スピノザ曰く、我々は未来における己が存在をも感取し体験する、と（*Sentimus experimurque, nos aeternos esse, Etique, V, prop. 23, scolie*）。

とはいえ、こういう理屈は通るものではない。自分が絶対的な神的存在と同一であることを数多〔性〕としての人間が知らぬ理由が判らなくなるからである。失墜、忘却、疎外などを言い訳にする必要が生じる。仮説としての「実体」が単一であるからには、この失墜、この忘却、この疎外は他ならぬ神の内に生じたそれではなければならない。つまり、実体の一元論から、グノーシス主義的かつ神智論的理論が生じることになる。「神の悲劇」論が生じることになる。失墜は他ならぬ神の内部で生じた事件なのだ、と。これは依然としてウァレンティヌスのグノーシス体系そのものである。〔どうやら〕魂が父なる神を忘却した〔らしいのである〕（プロティノス『エネアデス』V, 1, 1）。

《魂に父なる神を忘却せしめたのは果して何者か。神から出た諸断片 (moiras ekeithen ousas)である魂が、まるで父を知らず、己れをも己れの正体をも知らぬのは何故か。魂の苦悩の根本原因は敢為 (tolma) であり、生成であり、最初の他者性であり、自己の自己帰属性への願望である》。

つまり、プロティノスによれば、神性の圏域に悲劇が起こったのである。現実には「一〔者〕」である諸存在の個体化すなわち数多化が生じたのである。仮象としての諸存在の数多性の原因となる何らかの間違いが起こったのである。

教父 (ギリシャ教父, ラテン教父, シリア教父) の説, 卓越した神学者の説, 別けても神秘神学の指導者のそれは〔後の〕スピノザ説と対立する。前者はこう考えた。ヘブライの聖典群の内容は勝れて思弁的であり, 認識すべきもの, 知解すべきものである, と。文字通り, 形而上学的なものである, と。

1935年, マルティン・ハイデガーがフライブルク・イン・ブライスガウ大学の学生に語ったことは事実と反する。13世紀ならびに14世紀初頭のキリスト教徒であるスコラ学者はヘブライの「創造」論がヘブライ語からラテン語に訳された聖書中に書かれていたが故にこれを受け容れたのではない。合理的分析によって, つまり経験から出発する形而上学的分析によって, この理論が「真」であることを再確認したのである。言わば, 再度, 坂道を登ったのである。再確認し, 故にそれを立証し, 故にそれを会得したのである。

宇宙は絶対「存在」ではない。絶対「存在」は宇宙ではない。宇宙は〔或る瞬間に〕始まり, 絨緞のように, 衣服のように損耗する。ヘブライの神学者(これはもう歴とした形而上学者である)は紀元前10世紀か12世紀に, 或いはそれ以前に, 上記の事実を察知し, 見抜き, 理解し, 認識した。その方法を無視してはならない。

プロティノス, スピノザ, フィヒテ, カルル・マルクス, ショーペンハウアー, ニーチェ, ハイデガーは「ヘブライ人の形而上学は虚偽である」との確信から出発した。非＝被造の「存在」と被造の存在とを区別する理由はない〔との確信から〕。上記の仮定に従えば, 存在に二種の存在はない。存在は必然的に非＝被造である。観念論或いは唯物論の立場に立つ者が存在を二種に区別することはない。前者によれば, 存在はプラフマンであり, プロティノスの「一〔者〕」であり, スピノザの「実体」であり, フィヒテの「自我」である。後者によれば, それは非＝被造の「存在」としての物理的宇宙である。従って, 指導的観念論者の考えと指導的唯物論者のそれは次の一点で一致する。両者は言う, 存在に二種のそれはなく, 故にヘブライ人は誤りを犯し, 人々を欺く, と。早い話が, ヘブライ形而上学などありはしない, ヘブライ思想などありはしないということである。現にマルティン・ハイデガーの弟子たちはそう主張しているのである。フランスでも, その他の国々でも。ハイデガーは面白い問題を提起する。本人が観念論にも唯物論にも与しない哲学者だからである。ハイデガーは仮定する, 存在に二種の存在はなく, それは当然のこ

とながら非＝被造である，と。そして問う，そういう存在が非＝実在ではなくして実在であるという事実をいかに理解すべきか，と。この問いは存在の非＝実在の可能性を意味している。非＝実在の可能性を持つ存在なるものは必然的存在ではない。存在に二種の存在はなく，故にヘブライの一神論は假定上虚偽であり，故に存在は非＝被造なのだという。しかも存在は必然的ではないのだ，と。ならば，存在は，ハイデガーの弟子（フランス人）の言い種^{ぐき}ではないが，余計者〔余計に存在する〕ということになる。存在は不条理である。存在は実は非＝実在でなければなるまい。存在は，私の哲学との整合を保つべく，本来なら，実在してはならないはずである，と。

スピノザ哲学からマルティン・ハイデガーのそれに至る若干の例からも明らかであるが，ヘブライの一神論との，激しい，刺々しい対立は宇宙的・物理的・生物学的所与の実験的分析に基づくそれではない。所与の分析以前のものである。古代人の言う心情の秘密に属するものである。そこは侵入禁止区域なのである。

（了）